2 歴史が示す那須塩原～縄文から戦(いくさ)まで

那須塩原市には、縄文中期の大規模集落である槻沢遺跡や井口遺跡をはじめとする数多くの遺跡が残り、土器の散布地も含めるとその数は 70 か所以上にのぼります。那須扇状地が生み出した湧水地近くには縄文時代の遺跡が存在しており、この地が豊かな自然の恵みを有していた証といえましょう。

時は流れ、鎌倉時代に源頼朝が行った大規模な巻狩は、那須野が原ならではの歴史絵巻です。巻狩の舞台は那須郡一帯に及び、およそ三週間にわたり繰り広げられたと伝えられています。

頼朝の次男で三代将軍となった源実朝はその時の光景を想像し、『金槐和歌集』に、

武士(もののふ)の矢並つくらふ籠手の上に　霰たばしる那須の篠原

の歌を残しています。

平安末期から室町時代にかけては、那須氏、宇都宮氏といった豪族の争いの場となりました。各所に残る城跡が当時の攻防の歴史を物語っています。

江戸時代に入ると、この地域は大田原藩領、黒羽藩領、幕府領、そして塩原の地が宇都宮藩領と分かれました。戊辰戦争では塩原、関谷、塩野崎、板室、さらに三斗小屋において、旧幕府軍と新政府軍の間で激しい戦闘が行われました。

こうした歴史を物語る文化財が市内各所に残ります。

1．槻沢遺跡と井口遺跡

槻沢遺跡・井口遺跡は、西那須野狩野地区に所在する栃木県を代表する縄文時代中期中頃から後期前半（5,000 ～ 3,500 年前）の遺跡です。那須扇状地の扇央部に位置し、槻沢遺跡は権現山丘陵の北端の洪積台地上、井口遺跡はその北西の緩斜面に立地し、国道 4 号を挟んで 800 ｍほどの距離で対峙しています。

昭和 8 ・12 年 (1933・1937) に槻沢遺跡、昭和 15 年 (1940) に発見された井口遺跡の発掘調査が、大山史前学研究所によって行われています。これらの調査は、栃木県内の縄文時代はもちろん、古代を含めても集落遺跡の発掘調査の嚆矢として評価されています。大山史前学研究所は、大山巌元帥の二男大山柏が主宰し、大正 12 年 (1923) に東京都にあった大山邸内に史前研究室として開設されました。 9 月の関東大震災により焼失し、大山家が別邸・大山農場のあった西那須野に疎開したことで、槻沢・井口で縄文土器が散布していることが大山柏の耳に入り、発掘調査が実施されたと考えられます。発掘調査は所員の池上啓介が担当し、発見された竪穴 (袋状土坑) は人間の住居としては小さいことから、生活物資の貯蔵用の穴との解釈を示し、その後の袋状土坑研究の端緒となった調査として考古学的にも注目されています。

槻沢遺跡

槻沢遺跡は、東西 300 m、南北 500 mに及ぶ大規模な遺跡です。昭和 52 年（1977）の発掘調査で環状に住居跡が分布することが予想され、この地域の拠点集落と考えられています。これまでの調査で 200 軒近い竪穴住居跡が発見されており、中期後半の住居跡には土器と石を組んだ二つの火所がある特徴的な複式炉（写真）が設けられています。複式炉は東北地方南半を中心に北陸地方の雪国に分布する炉ですが、槻沢遺跡のものは東北のものに比べコンパクトで土器を埋設しない石組の複式炉などもあり、那須地方の独自性が見られます。

槻沢遺跡発掘調査区全景（平成４年）

また、木の実などの食糧貯蔵用の袋状土坑などの穴も 900 基ほど発見されています。昭和 52 年（1977）の調査では、関東･東北南部の型式のほか、両者を折衷したものや北陸地方の影響を受けたものなど、31 個の縄文土器が一つの土坑から一緒に出土したことから、平成元年（1989）に国の重要文化財に指定されました。

槻沢遺跡土器埋設複式炉

槻沢遺跡石組複式炉

深鉢形土器（残欠共）

井口遺跡

井口遺跡は、平成元年（1989）の圃場整備に伴う確認調査で、東西 500 m、南北 500 mに及ぶ大遺跡であることが確認されました。遺物の分布状況などから、天満宮付近を中心にいくつかの小集落で構成されるとも考えられています。過去３回の発掘調査は部分的な調査ですが、槻沢遺跡とほぼ同じ時期の中期中頃から後期前半の集落跡で、複式炉をもつ竪穴住居跡や袋状土坑のほか、県内では希少な敷石住居跡などが出土しています。

槻沢・井口両遺跡とも、遺跡全てを発掘したわけではなく、まだ地中に多くは残っています。集落の全容は分かりませんが、同じ時期の大規模な集落遺跡が近接して存在し、周辺にも小規模な西遅沢遺跡、西富山遺跡、槻沢西遺跡などがあります。このような例は、栃木県内はもちろん、全国的に希少なものとして注目されます。

その他の遺跡

市内各地区には、山岳地と水の乏しい那須扇状地の扇頂部から扇央部には、遺跡は少ないと考えられていました。実際、昭和 47・48 年（1972・1973）に行った栃木県教育委員会の遺跡所在調査では、48 遺跡（黒磯市 20、西那須野町 4 、塩原町 24）でしたが、西那須野町（昭和 63 ～平成元年）や那須塩原市（平成 26 ～ 28 年）の詳細分布調査によって、縄文時代を主に旧石器から中世まで 92 か所の遺跡が確認されています。

発掘調査された槻沢遺跡と井口遺跡以外は、土器や石器などの破片の散布のみですが、発掘調査が行われれば、重要な発見がある可能性は非常に高いといえます。

分野	名称
指定文化財	深鉢型土器（残欠共）・槻沢遺跡・槻沢遺跡出土の縄文土器
未指定文化財	槻沢遺跡出土品（指定品以外）・井口遺跡出土資料
周知の縄文遺跡	笹風遺跡・長久保遺跡・赤坂遺跡・平場遺跡・大ヌカリ遺跡・東山遺跡・上荒屋上遺跡・寺子遺跡・上荒屋下遺跡・山城遺跡・蛇沢遺跡・上の台遺跡・古下遺跡・上の沢遺跡（縄文）熊久保遺跡・杉渡土遺跡・間ノ沢西遺跡・七間々遺跡・中山遺跡・堂本遺跡・松ノ木平遺跡・小丸山遺跡・那須東原遺跡・川前遺跡・回顧橋遺跡・鹿野崎遺跡・上黒遺跡・野沢遺跡（金沢神社裏遺跡）・塚原遺跡・下山遺跡ほか

2．源頼朝による盛大な那須野巻狩

鎌倉時代の初期、建久４年（1193）に源頼朝により那須野の巻狩が 3000 人規模で 22 日間にわたって行われました。獲物は鹿・熊・狐などであったようです。『吾妻鏡』建久４年（1193） 4 月 23 日の条に「那須野等御狩、漸事終之間」とあり、狩野の地名が残るあたりで行われたと推察されています。

実朝（1192 ～ 1219）は、後にこの狩を想像して、「武士の矢並つくらふ籠手の上に　霰たばしる那須の篠原」（『金槐和歌集』）とうたっています。

3．郡界の攻防～中世の城館～

市内には、塩原地区に３か所（塩原（要害）城跡・狭間城跡・離室（はなれむろ）城跡）、箒根地区に３か所（田野城跡・野沢（真木）城跡・鳩ヶ森城跡）、鍋掛地区に１か所（杉渡戸要害跡）の計７か所の城館跡が確認されています。城館跡は、自然の立地を生かした丘陵地や渓谷地にあり、軍事的施設として山城や居館等の形態で、平安時代末期から室町時代にかけて築造されたものと考えられています。

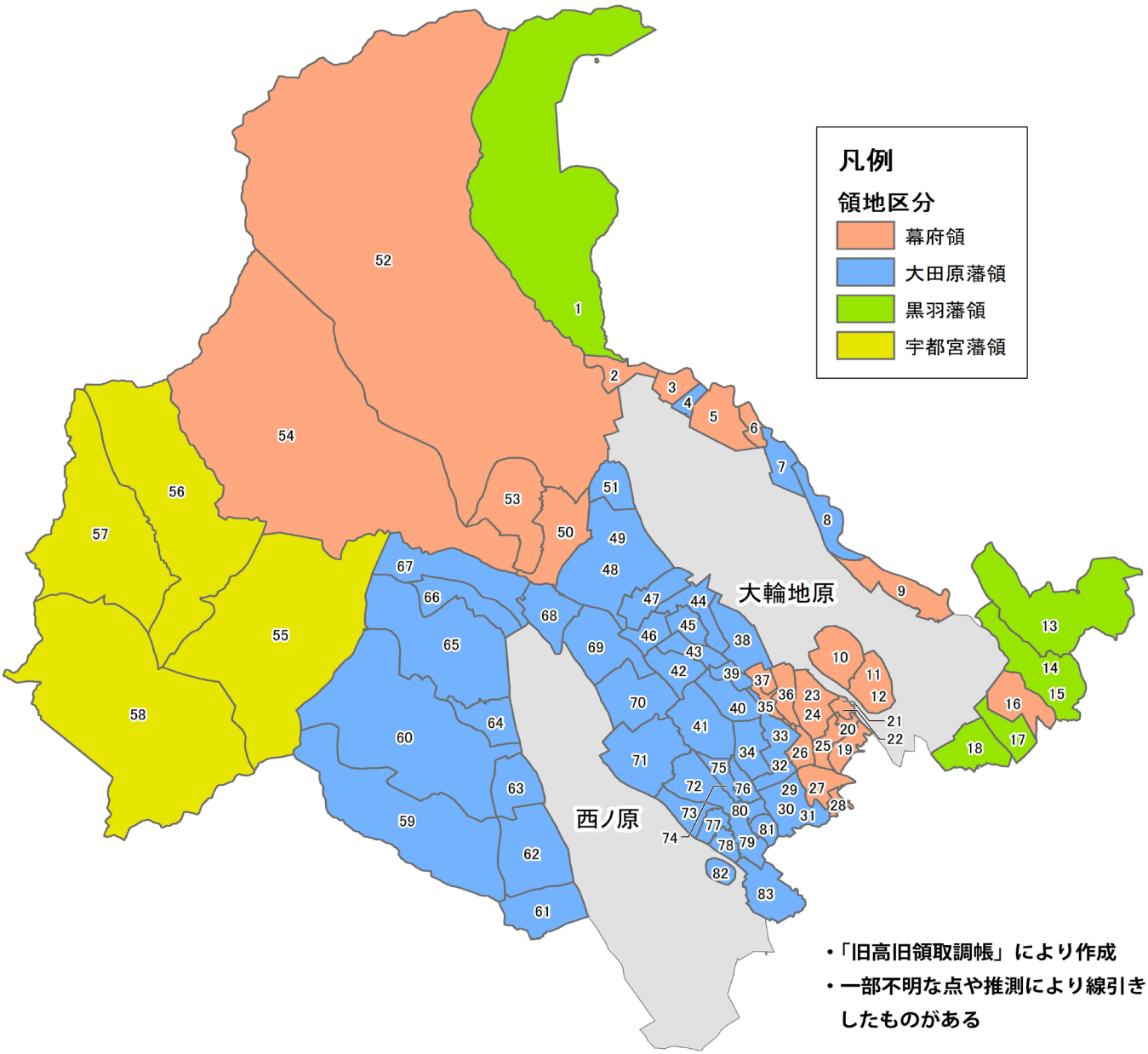
中世の塩原・箒根地区は、主に塩谷氏や宇都宮氏の家臣、また、一部は長沼（小山）一族等に支配され、それぞれの城館は、宇都宮氏・会津長沼氏・那須氏間の抗争の地でもあったと考えられています。これらの城（館）跡は、現在地元郷土史研究会会員の調査が進められていますが、中世の城（館）跡の確実な構築年代を示す資料は極めて乏しく、伝承によるものも少なくありません。

分野	名称
指定文化財	塩原（要害）城跡・鳩ヶ森城跡・野沢（真木）城跡・離室城跡・狭間城跡
未指定文化財	田野城跡・杉渡戸要害跡
その他文化資源	那須野巻狩・上郷屋・南郷屋・東小屋・沓掛

4．各藩・幕府領が入り乱れた江戸期の支配者

本市域は、江戸期には那須藩領、幕府領、黒羽藩領、大田原藩領などに分かれていました。また、塩原地区は主として宇都宮藩領となっていました。さらに広大な原野であった那須東原（大輪地原）は、周辺 44 か村の入会地（馬の飼料や屋根にふくカヤ・畑の肥料などとなる草を刈り取る共同利用の土地）、那須西原（西ノ原）は周辺 64 か村の入会地となっていました。

■ 江戸時代（幕末）の那須塩原市域の村落と領地区分



■『旧高旧領取調帳』に記載のある那須塩原市域の江戸時代の村

番号	村名	領地区分	石高	現在の地名
1	板室村	黒羽藩領	101 石	板室
2	油井村	幕府領	19 石	油井
3	細竹村	幕府領	13 石	細竹
4	赤淵村	大田原藩領	25 石	
5	岩崎村	幕府領	25 石	西岩崎
6	亀山村	幕府領	6 石	亀山
7	小結村	大田原藩領	20 石	小結
8	鳥野目村	大田原藩領	23 石	鳥野目
9	黒磯村	幕府領	159 石	黒磯、橋本町、本郷町
10	上厚崎村	幕府領	170 石	上厚崎
11	下厚崎村	幕府領	164 石余	下厚崎
12	長島新田	幕府領	123 石余	
13	寺子村	黒羽藩領	1,565 石余	寺子
14	杉渡土村	黒羽藩領	61 石余	越堀
15	越堀村	黒羽藩領	153 石余	
16	鍋掛村	幕府領	527 石余	鍋掛
17	樋沢村	黒羽藩領	190 石余	
18	野間村	黒羽藩領	133 石余	野間
19	三本木村	幕府領	246 石余	三本木
20	山中新田	幕府領	36 石余	山中新田
21	上大塚新田	幕府領	76 石余	上大塚新田
22	下大塚新田	幕府領	39 石余	佐野あたり
23	東沓掛村	幕府領	213 石余	沓掛
24	西沓掛村	幕府領	179 石余	
25	東小屋村	幕府領	278 石余	東小屋
26	大原間村	幕府領	259 石余	大原間
27	沼野田和村	幕府領	376 石余	沼野田和
28	木曽畑中村	幕府領	109 石余	木曽畑中
29	下中野村	大田原藩領	327 石余	下中野
30	東荻野目村	大田原藩領		
31	袋島村	大田原藩領	108 石余	
32	島村	大田原藩領	193 石余	島方
33	方京村	大田原藩領	201 石余	島方、方京
34	上中野村	大田原藩領	288 石余	上中野
35	前弥六村	幕府領	140 石余	前弥六
36	北弥六村	幕府領	173 石余	北弥六
37	唐杉村	幕府領	123 石余	唐杉
38	塩野崎村	大田原藩領	197 石余	塩野崎
39	波立村	大田原藩領	230 石余	波立
40	和田村	大田原藩領	390 石余	北和田
41	笹沼村	大田原藩領	128 石余	笹沼
42	無栗屋村	大田原藩領	68 石余	無栗屋村
43	中内村	大田原藩領	117 石余	中内
44	鹿野崎村	大田原藩領	112 石余	鹿野崎
45	上郷屋村	大田原藩領	29 石余	上郷屋
46	洞島村	大田原藩領	76 石余	洞島
47	箕輪村	大田原藩領	167 石余	箕輪
48	高林村	大田原藩領	596 石余	高林
49	赤坂村	大田原藩領	64 石余	
50	木綿畑村	幕府領	373 石余	木綿畑
51	箭坪村	大田原藩領	184 石余	箭坪
52	百村	幕府領	677 石余	百村
53	鴫内村	幕府領	199 石余	鴫内
54	湯宮村	幕府領	189 石余	湯宮
55	下塩原村	宇都宮藩領	299 石余	塩原
56	中塩原村	宇都宮藩領	200 石余	中塩原
57	上塩原村	宇都宮藩領	301 石余	上塩原
58	湯本塩原村	宇都宮藩領	137 石余	湯本塩原
59	宇都野村	大田原藩領	699 石余	宇都野
60	金沢村	大田原藩領	684 石余	金沢
61	下大貫村	大田原藩領	519 石余	下大貫
62	上大貫村	大田原藩領	701 石余	上大貫
63	高阿津村	大田原藩領	103 石余	高阿津
64	下田野村	大田原藩領	113 石余	下田野
65	関谷村	大田原藩領	260 石余	関谷
66	遅野沢村	大田原藩領	65 石余	遅野沢
67	蟇沼村	大田原藩領	77 石余	蟇沼
68	折戸村	大田原藩領	31 石余	折戸
69	上横林村	大田原藩領	96 石余	上横林
70	横林村	大田原藩領	26 石余	横林
71	接骨木村	大田原藩領	217 石余	接骨木
72	上井口村	大田原藩領	280 石余	井口
73	下井口村	大田原藩領	165 石余	
74	中野内村	大田原藩領	145 石余	西遅沢村
75	西遅沢村	大田原藩領		
76	東遅沢村	大田原藩領	70 石余	東遅沢
77	富山村	大田原藩領	65 石余	西富山
78	高柳村	大田原藩領	83 石余	高柳
79	槻沢村	大田原藩領	135 石余	槻沢
80	関根村	大田原藩領	48 石余	関根
81	東関根村	大田原藩領	73 石余	東関根
82	南郷屋村	大田原藩領	37 石余	南郷屋
83	石林村	大田原藩領	191 石余	石林

※『旧高旧領取調帳』により作成

5．那須塩原地区と戊辰戦争

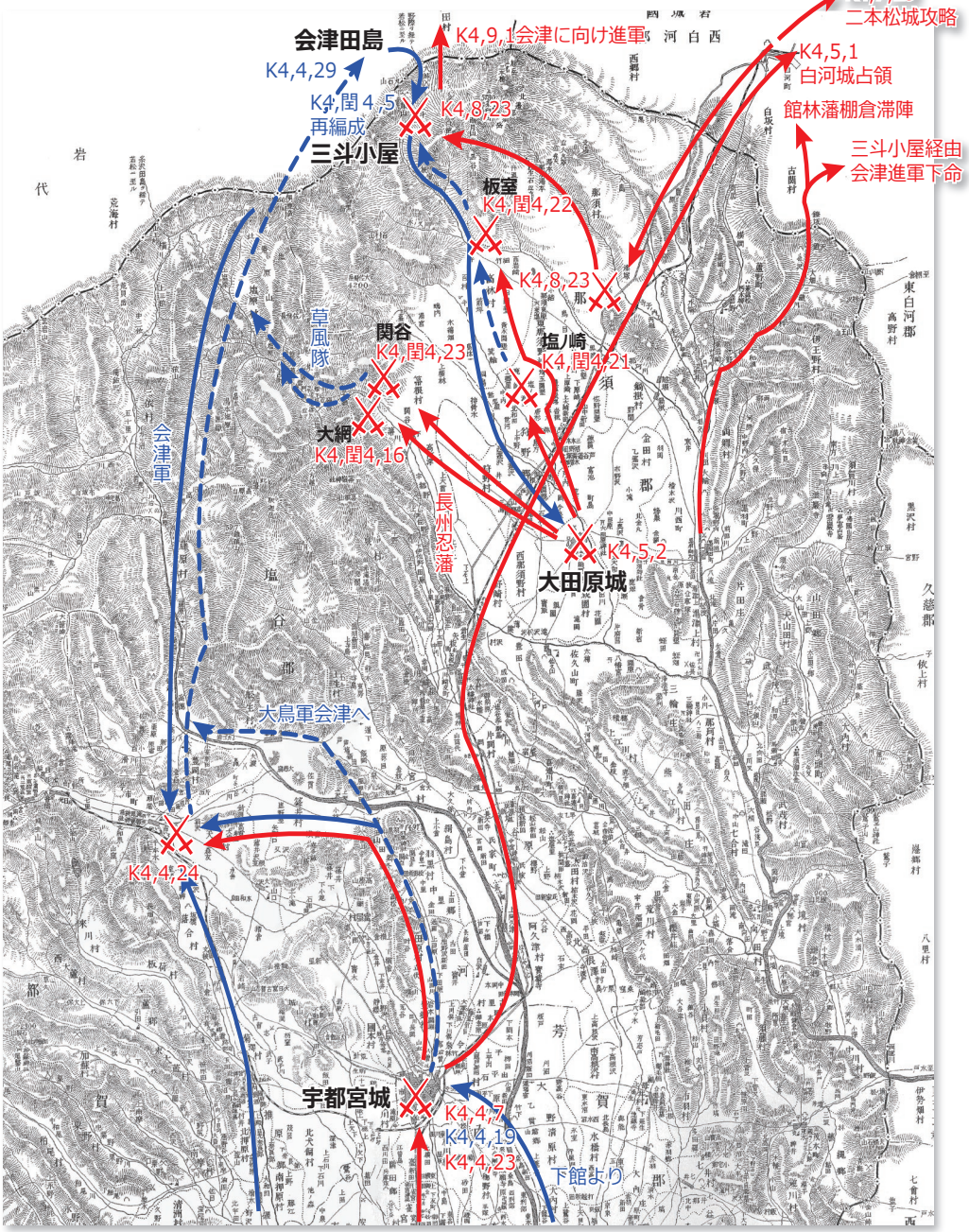
日本の近代化のために日本人同士が戦った戊辰戦争では、塩原地区・板室・三斗小屋付近において新政府軍と旧幕府軍との間で激しい戦闘が行われました。

慶応４年（1868）閏４月には大網（16 日）、塩野崎（21 日）、板室（22 日）、関谷（23 日）で新政府軍と旧幕府軍の戦いがありました。中でも、板室での戦いは５時間にも及び、戦死者 17 人（資料によっては 30 ～ 60 人）に上りました。またこの戦いでは、穴沢、油井、阿久戸、板室の集落で計 64 戸が新政府軍の放火によって焼失しました。

また、８月 23 日には三斗小屋宿において激しい戦いがあり、戦死者 16 人、負傷者 10 人を数えました。

塩原では、旧幕府軍と新政府軍との攻防が繰り返されていましたが、劣勢になった旧幕府軍は会津への撤退に先立ち、８月 20 日と 23 日の二日に分け塩原全村を焼き払いました。焼かれずに残ったのは妙雲寺と塩原八幡宮などの寺社のみだったと伝えられています。

■ 戊辰戦争進軍図



※栃木県史編さん委員会『栃木県史』通史編５近世二』（昭和 59 年）を参考に作成

分野	名称
指定文化財	板室古戦場・三斗小屋宿跡・妙雲寺（本堂）・塩原八幡宮（本殿）
未指定文化財	阿久戸の供養碑・戊辰戦死若干墓
その他の文化資源	三斗小屋誌

特攻隊基地にもなった陸軍那須野飛行場

太平洋戦争（1941-1945）中の昭和 17 年（1942）、黒磯地区埼玉に熊谷飛行学校の那須分教所として敷地総面積約 280ha にも及ぶ飛行場が開設されました。

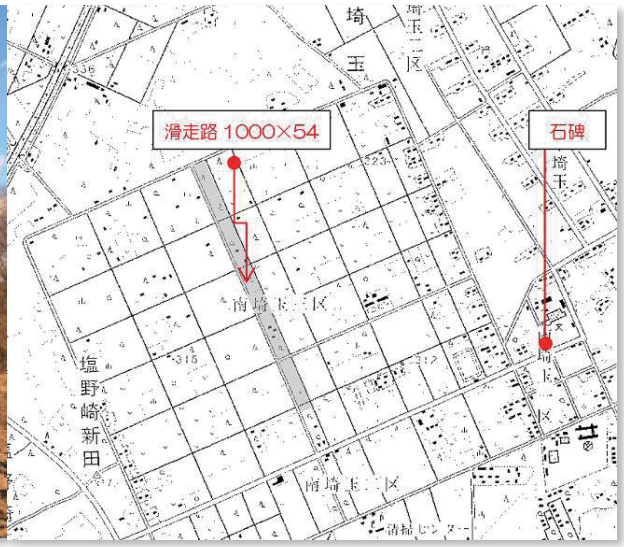
藤田農場及び青木農場、さらに、隣接の集落から土地を収用して、３か年にわたる工事を経て開設されましたが、戦局の推移と共に組織は再編され、本土空襲が激しくなった昭和 20 年（1945）には、爆撃で機能不全となった茨城鉾田陸軍学校の基地として、特攻機の基地にもなりました。７月 12 日及び８月上旬には米軍による激しい空襲を受け、場内の死亡者が 17 名を数えるに至りました。

敗戦後、軍事施設は進駐軍により焼き払われましたが、昭和 22 年からは外地からの引揚者のため那須農場帰農組合などが設立され、開拓地へと生まれ変わりました。

飛行場跡地に格納庫の遺構（コンクリート基礎）が残っていましたが、平成 30 年（2018）１月開発のため撤去されました。撤去前、教育委員会では所有者の同意を得て遺構の調査を行い、記録を残しました。

格納庫跡（平成 30 年消失）

■ 陸軍那須野飛行場敷地図



分野	名称
未指定文化財	記念碑（２基）